

論文名：里親養育にみる子育ての可能性（要約）

新潟大学大学院現代社会文化研究科

氏名 坂井 摂子

〈目次〉

序章 課題と方法

1章 里親研究の動向と課題

1節 里親研究の動向

1項 児童福祉法成立後の里親研究

2項 里親制度改正に伴う里親研究の動向

2節 里親研究の課題

2章 里親制度

1節 里親制度の展開

1項 里親制度の萌芽

2項 1987年の改正

3項 2002年から始まる大改正

4項 2008年大改正後の対策

2節 里親制度の課題

3章 近代日本の里親慣習

1節 里親研究からみた里親慣習

2節 里親慣習

1項 児童福祉法制定以前の里親慣習

2項 里親慣習と貰い子

3節 貰い子と他児養育

1項 貰い子の待遇

2項 労働力確保のための貰い子

4節 小括

4章 里親養育に関する意識の変遷

1節 里親養育に対する意識の研究

2節 現代の子育てと里親養育

3節 小括

5章 現代の日本の子育て

1節 子育ての不安

1項 育児不安

2項 子育ての不安

2節 子育ての不安がもたらす問題

3節 小括

6章 里親養育にみる子育て

1節 新潟県の里親養育

- 1項 里親委託の高率
- 2項 新潟県里親会
- 3項 新潟県の里親委託の特徴

2節 里親の子育て

- 1項 里親登録の背景
- 2項 里子の特徴
- 3項 里親の子育て

3節 考察

終章 子育てにおける里親養育の意義

注・参考文献

〈要約〉

近年日本では里親委託の優先が掲げられている。しかし、里親制度がいかにより子どもの育成にとって有意義であるかについて解明されてこなかった。さらに、里親養育を一般の子育てと結びつける視点からの検討はこれまで行われてこなかったため、里親をしていない人の意識と関連付けて取り上げてこなかった。これまでの里親研究は制度論が中心であり、里親里子の親子関係を扱ってきたのは家族社会学である。家族社会学の里親研究では、関係の危機、問題行動への対処など里親養育の特殊性が検討されてきたため、里親養育のよさをかならずしも取り上げてこなかった。本論文では、従来の研究に欠けている里親里子の関係性を捉え、現代の子育てにおける現代的な意味を里親養育の中に見出した。

本論文の1章では、里親研究の先行研究をレビューし里親研究の課題を明らかにした。里親研究は、里親制度がなぜ日本で進展しないのかを問い、日本人の意識の弊害と制度自体の問題を指摘してきた。しかし、里親不振の要因とされた意識を検討してこなかった。里親になる可能性のある一般の意識についても分析する必要がある。里親研究は人びとの意識に着目し、人々がどうしたら里親に関心を持つのかを考えなければならない。そのために、里親里子の日常生活を一般の人びとの生活と関連付けて描き出し、里親養育の実態と里親の利点を人々に伝えることが重要である。

2章では、児童福祉法成立以後の里親制度の展開を検討した結果、里親制度は制定以前の里親イメージや養子縁組の影響を受けて改正されてきたことが把握できる。里親制度成立過程でも里親への不信の声がでたり、里親制度の中に養親を取り入れたりしてきた。現在も里親の3分の1、地方では大半が養子希望であり、養子縁組の問題は残されている。児童福祉法改正で、里子を養子と捉える誤解があることを理由に区別された「養子縁組を前提とした里親」は、依然として里親制度に影響を与えていたことを明らかにした。

3章では、里親制度が法的に制定される以前の里親慣習を整理し、養子と里子の相違、里親に対するネガティブなイメージとは何かを検討した。そのイメージは労働力と養育料に起因していた。非相続養子である貰い子が労働力に、養育料は近世以降の都市の里親慣習

【別紙2】

に結びつけられていた。児童福祉法制定委員などが、限定的な貰い子や養育料を法に則った保護対象に当てはめ、メディアで普及させたことがネガティブなイメージ形成につながったことが把握された。

4章では、里親養育の増加を阻むのは何か、一般の人びとを対象にした里親養育についての意識を検討した。意識調査を整理した結果、里親制度の認知度は高く、養子縁組との違いも周知されていたことが把握され、里親を引き受けない理由には現代における親の子に対する養育不安や迷いが見出された。さらに、一般の人びとへのインタビュー調査では、子育て経験者は里親制度を肯定的に捉えていたが、子育ての大変さを実感している人は他人の子の受け入れを拒否した。このことは、子育ての困難が里子の受け入れを阻んでいることを示唆している。

5章では、里親委託を阻む現代の子育てについて先行研究をレビューし、子育てを乳児期から成人期まで幅広く捉え、子育て不安について考察した。学齢期以降の不安は、他児比較や情報の氾濫を背景に、勉強を強制することと、自主性の尊重の狭間で、どう子育てをしていいかという方法に関する不安であった。親の不安は子の育ちに影響を与え、親が子どもへの関与を強め、子どもが自立しにくいことが明らかになった。

6章では、里親養育の実態を新潟県で調査したデータを提示し考察をくわえた。新潟県では、親族里親と養子縁組里親が里親数を維持上昇させ、養子縁組里親が別の新たな子どもの養育里親になる場合が多い。調査で明らかになったことは、里子を自立させるための日常的な里親の関わりである。一つは、里親は里子を簡単に甘やかしたり怒ったりしない。もう一つは、子どもに決めさせていることである。この調査からは、里子の自立を意識して、里親は情意面の人間形成と手伝いなどの生活能力の育成を重んじていた。つまり、里親は子どもを一人の個人として関わり、子どもの意志を尊重していた。

以上から、里親を子育てのプロとして学ぶ対象として捉えなおすことによって、里親養育は現代の自立できない子どもたちの子育てに活用することができる。里親の養育態度から、私たちは子どもを私物化せずに自立した個人としてみること、叱ることや手伝いの良さを見直して、自立を目指した子育てをしていくことがいかに大切であることを学ぶことができる。